慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	千葉県八日市場市松山・高市貝塚の調査について
Sub Title	On the excavation of the shellmound of Takechi, Yokaichiba City, Chiba Prefecture
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo) 藤村, 東男(Fujimura, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.2 (1973. 1) ,p.83(199)- 99(215)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 目次のタイトル：千葉県八日市場市・高市貝塚の調査について
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19730100-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

千葉県八日市場市松山・高市貝塚の調査について

清水潤三
藤村東男

一、序

千葉県八日市場市松山高市五八三番地所在の高市（たけち）貝塚は、一九六六年七月同市内の建材業者による採土作業中に、切り崩した土の中に貝殻等が含まれていたことを、端緒として発見されたものである。その発見の知らせは、たまたま同市飯塚多古田泥炭層遺跡出土品の整理研究を行なうために、八日市場を訪れていた鈴木公雄・岡本孝之・藤村東男の三名にもたらされた。それを受けた鈴木らは、直ちに現地におもむき、現状の確認に努めたが、既に遺跡の大部分は採土作業によって、表土層以下を深さ四～五米ほどえぐり取られ、わずかに遺跡の東側を幅六米ほど残すのみとなっていた。しかもその残された部分さえもが、ロームの地肌を表面に露出している状態であり、かろうじて附近に散布しているわずかの貝殻と土器片とによって、ここに貝塚が存在していたことを推しうるのみとなっていた。このように本貝塚は調査着手前に、その大半は壊滅の状態であったが、附近で採集された遺物から、高市貝塚が千葉県九十九里浜沿岸地域では稀な縄文時代早期の遺跡であり、極く限られた範囲内ではあるが、未だ調査可能な区域が存在しているとの判断に基づき、現状を維持するために業者に対して、採土作業の一時中止を求める処置をとった。

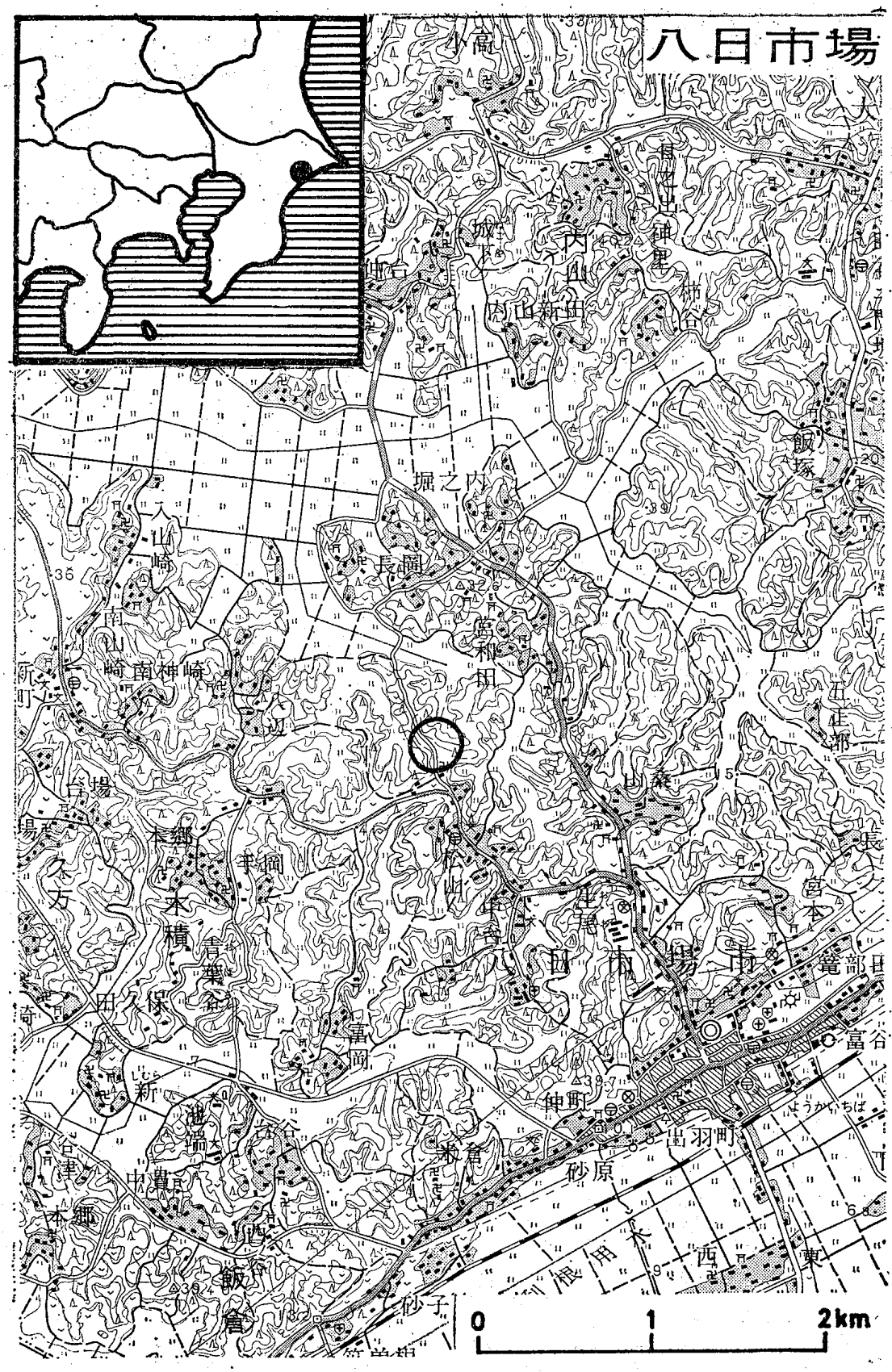
鈴木より報告を受け、清水は作業を一時中断するという業者の了解を得たうえで、本塾文学部民族学考古学研究室が、一九五二年より継続して行なってきた千葉県栗山川流域における貝塚遺跡の地域的研究（清水潤三　一九五四・五八、清水・近森正　一九五九、慶応高校歴史研究会　一九六一・六五、鈴木公雄　一九六二・六五、藤村東男　一九六八）の一環として、本貝塚の残存部分の調査を計画し、一九六六年九月一日より五日まで発掘調査を実施した。

この調査によって、既に貝塚の主要な部分は消滅しているものの、本貝塚が栗山川流域に存在する十数カ所の貝塚遺跡のなかでも、もっとも古い縄文時代早期の茅山式に属するものであること、さらに焼土塊の堆積したピット状の落ち込みが存在することを明らかにしえた。今日調査後の整理が一応終了し、また早期の貝塚に伴なう炉址状の遺構について、調査報告を行なう必要のあることから、ここに成果の大要を公にする次第になったものである。

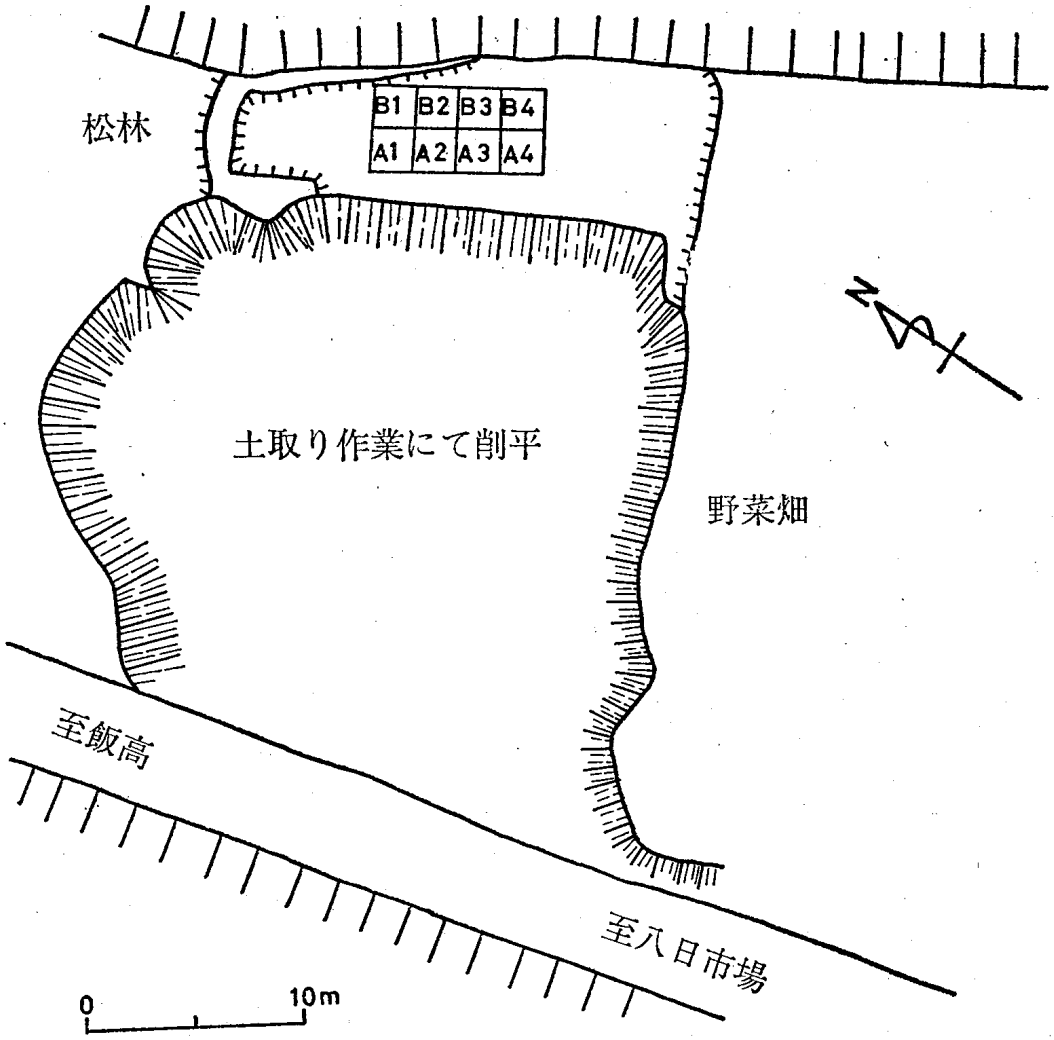
二、遺跡の位置

標高二十～四十米ほどのなだらかな丘陵が続く下総台地は、その東端の九十九里浜沿岸地域において、中小河川による丘陵部の侵蝕を受け、随所に樹枝状の複雑な支谷を形成し、その結果河川流域部には数多くの支丘が存在している。なかでも九十九里浜に注ぐ河川のうちで、もっとも広い流域面積を持つ栗山川の沿岸には、香取郡多古町附近で栗山川に合流する高谷川をはじめ、多古橋川、借当川などの諸支流の流域部に、幾多の支谷が形成され、この地域ではもっとも変化に豊んだ複雑な地形をつくりだしている。

栗山川の支流のうち、西から東に向う流路を持ち、多古町附近で栗山川に合流する借当川は、その上流の長岡と八辺の間で、南方向に大きく湾入することによって二つ支谷を形成し、それらにはさまれた南北に細長く延びる馬の背状の丘陵の鞍部に、この貝塚が存在するのであるが、馬の背状の丘陵のため遺跡の東西方向は、ともに脚下に支谷がせまり、約四



第１図　高市貝塚の位置（○印）



第2図　高市貝塚測量図

十米と幅のきわめて狭い部分に位置している。すなわちこの丘陵部の西側に沿って、八日市場市松山と長岡とを結ぶ道路が走るが、この高市貝塚は松山より二百米ほど北に進んだ向かって右側の標高約二十五米の平坦な丘陵上に位置する。遺跡の状態についてみると、長い間松林となっていたために、その発見が遅れ、貝塚の存在を知りえた時には、既に採土作業が道路から東西約三十米、南北約三十米の範囲に及んでおり、東側にあと数米を残すのみという状態になっていたため、遺憾ながら充分観察を行ないえなかったが、作業関係者の話によると、旧地表面は東西両方向になだらかな傾斜を示し、また貝殻等の発見は作業範囲内の全域に及んでいたわけではなく、遺跡の東側に偏っていたとのことであった。この貝殻発見区域の面積が小さかったということは、縄文時代早期の貝塚が一般に小規模であると云われていることと符合す

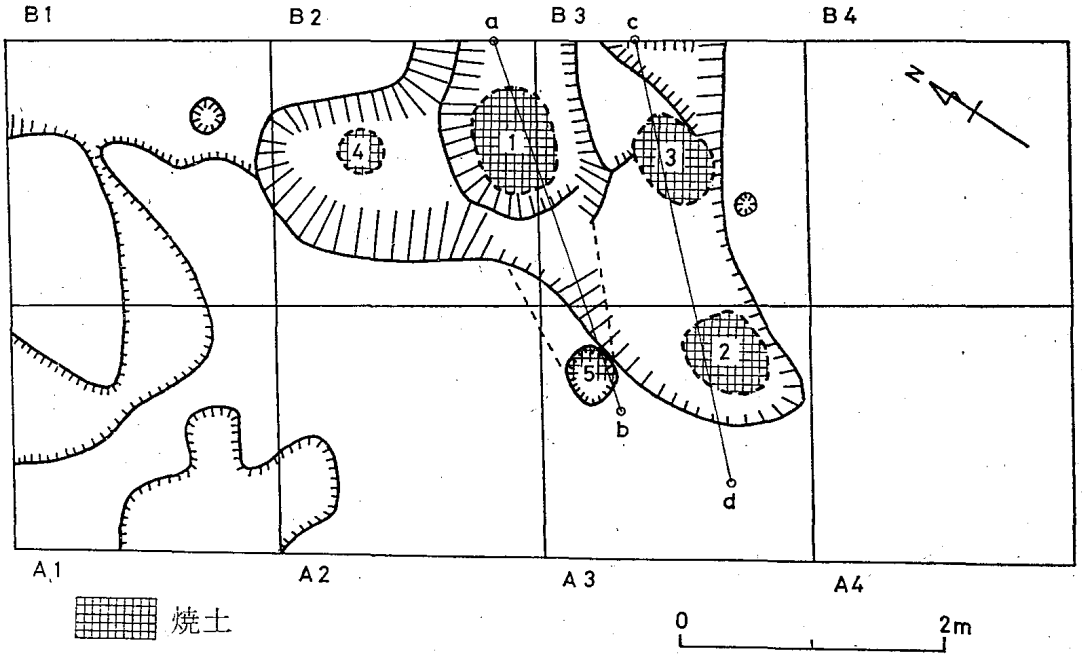
るもので、高市貝塚の場合もその例外ではなかったものと考えてよかろう。

なお本貝塚の東南約三百米の地点には、九十九里浜に向かって開口した支谷の谷頭があり、借当川からの湾入部とを合わせ考えると、高市貝塚の所在地は、借当川流域と九十九里浜に面した地域とを結ぶ最短距離に位置しているものと云える。ところでこの高市貝塚の周囲には、北西約一・三粁に縄文時代中期の八辺貝塚（清水　一九五八）、同じく北西約二・三粁に前期の宿井下貝塚（清水・近森　一九五九）、西方約一・八粁に、後晩期の久方貝塚（鈴木　一九六五、慶応高校一九六五、藤村　一九六八）、北東約一粁に、中後期の大浦貝塚（慶応高校　一九六一）など、高市貝塚と同じく借当川の支谷に面した縄文時代の諸貝塚遺跡が存在している。

三、調査の概要

調査は遺跡の大半が既に失なわれていたため、東側にかろうじて残っていた部分を対象として、九月一日より五日までの五日間にわたって行なった。先ず南北に延びた丘陵部の東側の崖に沿って、東西二米、南北八米のトレンチを二本併行に設け、それを西側よりAトレンチ、Bトレンチと称し、さらにA・B両トレンチとも南北を二米ごとに区切り、東西二米、南北二米を一区画として、それぞれを北側から1区、2区、3区、4区と呼ぶこととした。

調査は各区とも同時に行なったが、B2、B3区を除いては調査開始後直ちにロームが露出し、表土層以下ロームに至るまでの堆積物が、既に削りとられていたことが明らかになったため、以後の調査はローム中に作成された遺構の検出に重点を置くこととなった。その結果、A1、B1区からは幅二十～四十糎、深さ二十糎の溝状のものと、長径一米五十糎、深さ十糎の平面が不整形をなす黒土層の堆積が認められた。これはローム上面の落ち込みの中に黒土が堆積したものであり、そのいずれの黒土の中からも、茅山式土器の小破片と共に、ハイガイ・ダンペイキサゴ・マガキなどの貝殻が少量出土した

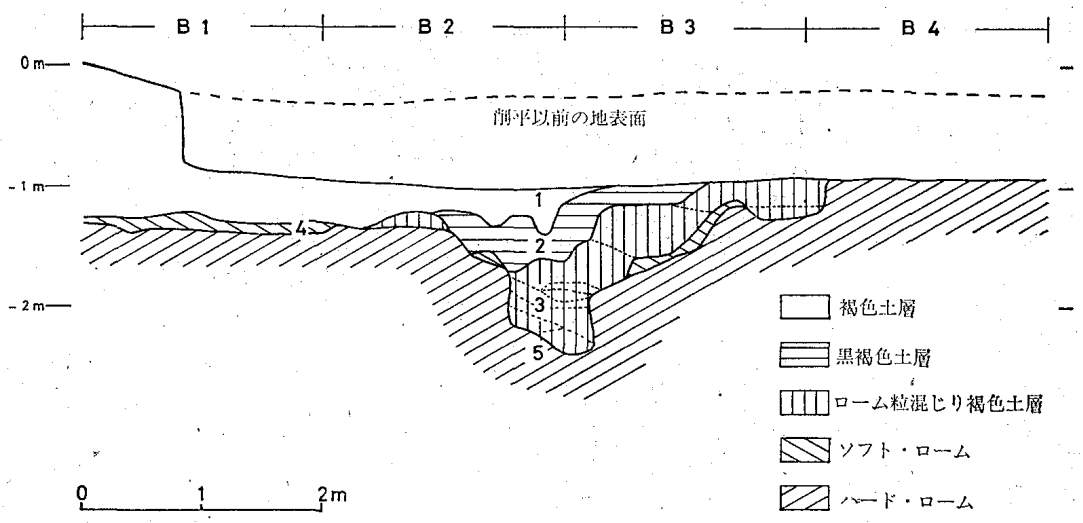


第3図　調査区平面図

のみで、黒土層堆積の成因等については明らかにしえなかった。

続いてB2・B3・A3区から、長径約三米ほどで平面が不整形のピットを発見した。このピットはもっとも深い所で、ロームを一米四十糎掘り込んでつくられ、その掘り込みは、北・東・南の三方向に拡がりを示しているが、東側は崖に接するため、その全貌の確認には至らなかった。なおピットの掘り込みは、壁の部分がいくらか傾斜し、その底面が平らになる、いわゆるナベ底状を呈しているが、その深さは一様ではなく、もっとも深い部分は、B2、B3区の境界線のあたり（ピットのほぼ中央部）で、一米四十糎を示し、周辺部では一段浅く、五十～八十糎となっている。

さてこのピットの内部には上層より、黒褐色の土層、そしてロームの細かい粒が混じった褐色の土層が堆積し、最下部のローム面に接する位置には、発見の順に従って名付られた1号から5号までの五つの焼土塊が存在する。これら五カ所の焼土のうち、1号と5号、2号と3号は、その堆積しているローム面が連続しており、このことからそれぞれが組み合わさって、ひとつのまとまりを示すものではなかろうかと思われる。以下各焼土の堆積状態の説明を記すと次のようになる。



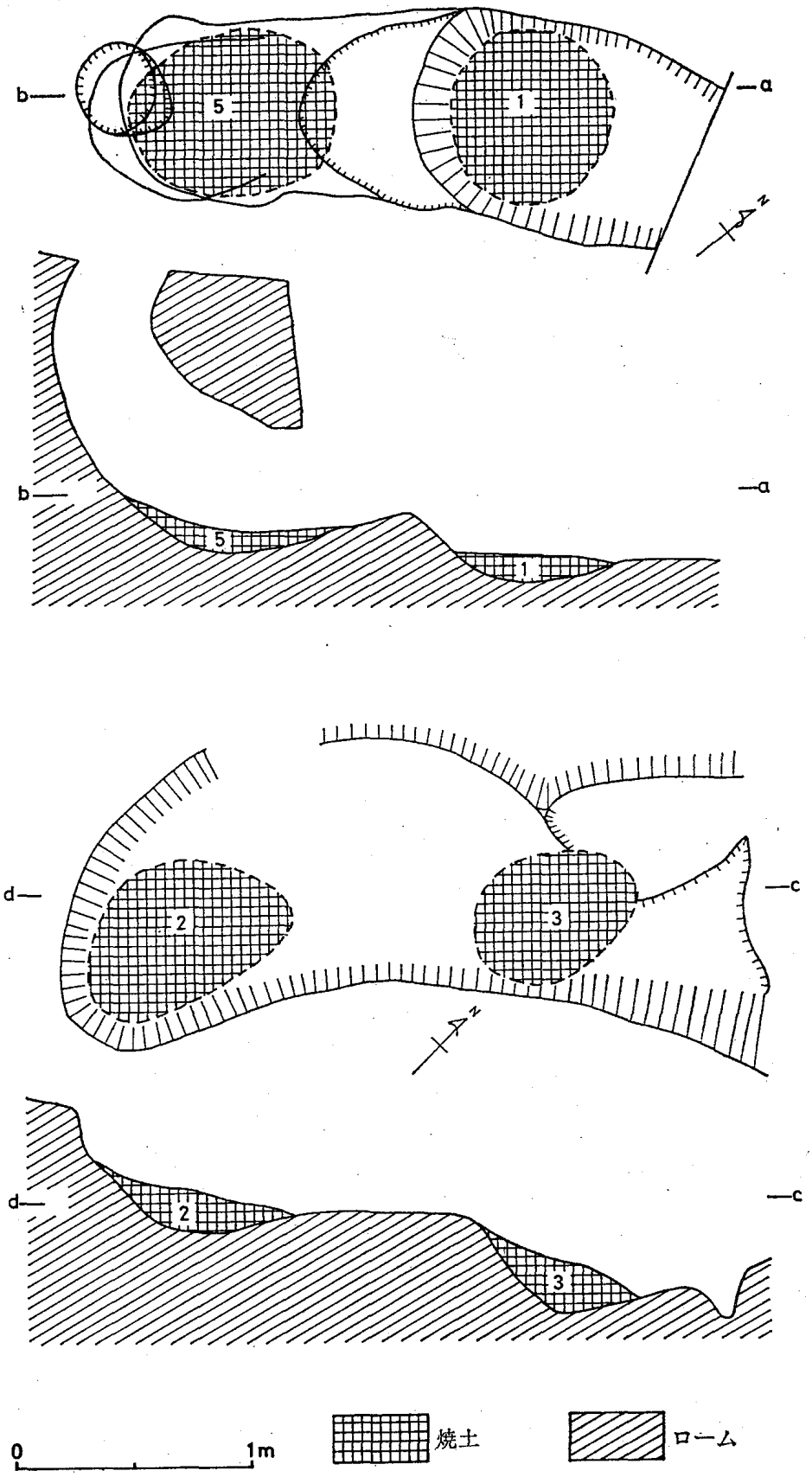
第4図　トレンチ東壁断面図

〔1号・5号焼土〕

5号焼土が堆積しているのは、第5図上段に示した如く、ロームを掘り込んでつくられた煙出し状の穴の直下で、云わば焚口にあたる部分であり、この煙出し状の穴は、幾分反り気味に傾斜し、中途からゆるやかな傾斜に変わり、いわゆるナベ底状の底面に続く。底面のもっとも深い所は、ローム上面から、一米十五糎さがった位置であるが、焼土はこのもっとも深い焚口かと思われる部分に、九十糎×七十糎の楕円形の平面をもって、最大十糎ほどの厚さで堆積している。なおこの焼土内からは第6図に示した土器一個体が出土している。

1号焼土は、5号焼土の東方五十糎の一段低くなった、平面が径七十糎の円形をなすロームの窪みに、同じく最大十糎の厚さで堆積している。ところで、この1号・5号焼土とも、その状態はサクサクとしたもので、赤く焼けた土器片以外には、灰、木炭等の不純物を含まず、比較的短期間に生成したものと思われるが、焼土とその下部のローム面との間には、炉址、窯跡などで認められるように、焼土の下の土が加熱を受け、その色調が漸移的な変化を示すといった状況は見受けられなかった。

5号焼土内よりは、第6図に示した土器が出土し、既に口縁の全部と胴部の約½を欠いているが、この焼土の生成された時期を検討しうる資料となっ



第５図　焼土実測図（上段１号・５号焼土　下段２号・３号焼土）

た。この土器は総計二十二点の破片に破砕されており、そのうち胴部上半部の一点のみは、周辺の破片が黒褐色を呈しているのにもかかわらず、再度の加熱を受けて赤褐色となっており、この土器が破砕後再び高熱を受けたことを示してい

る。なおこのように土器表面の色調が同一個体内において、異なることは縄文土器一般に見受けられる事実であり、その多くは土器製作時の焼成あるいは土器使用時における加熱によるものと思われ、その色調の変化は漸移的なものであるが、本例の場合は、赤褐色を呈する破片の周囲は赤く焼けておらず、その割れ目を境にして全く異なった色調を示しているのであって、通常の加熱とはその趣きを異にすることは明らかであるので、本資料の再度の加熱を土器の破砕後に行なわれたものと考えた。ただ問題となるのは、このような再度の加熱を受けていない破片が、同一個体の赤く焼けた破片と共に、何故に焼土内に堆積していたかということである。これはこの焼土の成因とも深く結びついた問題であるが、今回の調査においては同様の現象を示すものは、本例以外には認められないので、これ以上立ち入った想定を加えることは差し控えておきたい。ただわれわれはこれと類似した状況を、同じく栗山川流域に存在する山武郡横芝町姥山貝塚で経験している。姥山貝塚の場合は、その概報に記したように（鈴木　一九六八、藤村　一九七二）、四次・五次調査で発見された焼土内からは焼けた獣骨、土器片と共に、再度の加熱を受けぬものも少量ではあるが含まれていたのである。姥山貝塚の例に関しても、未だ充分なる結論には到達していないが、焼土とその下層との境界面において出土した獣骨、土器片が焼けていないことから、この焼土は調査区以外の地点で作成され、その後現在の位置に移動堆積した、いわゆる再堆積層であり、焼けていない獣骨、土器片等は、その移動堆積が行なわれた際に、焼けているものと共に焼土中に含まれるに至ったものではないかとの判断を下しておいた。

〔2号・3号焼土〕

前記の1号・5号焼土の南側に隣接して発見されたものであるが、煙出し状の穴の有無を除いては、その形状が類似し、ロームの窪みに焼土が堆積していることから、相似た性格をもったものと思われる。まず上方にある2号焼土は、八十糎×七十糎の楕円形をしたロームの窪みの中に、最大二十糎の厚みを持って焼土が堆積しているのであるが、この焼土

の直上の位置には、5号焼土で認められた煙出し状の穴は見受けられず、わずかに壁面が高さ二十糎ほどたちあがりを示すにすぎない。

3号焼土は、この2号焼土より一段低く、東方八十糎の位置にあり、ロームのくぼんだ五十五糎×七十糎の楕円形の範囲に焼土が堆積しており、もっとも深い所はその厚みが二十五糎に及んでいる。2号・3号焼土の状態は、1号、5号焼土のそれと同様に、サクサクしたもので、赤く焼けた土器片以外には、ほとんど混じりけのないものである。

〔4号焼土〕

1号・5号焼土の北側の一段高いテラス状の位置に、径四十糎の円形をしたロームの窪みがあって、その中に厚さ十糎ほど焼土が堆積している。この4号焼土は、他の例とは異なり、焼土が一カ所のみであるが、その状態等については、他と同様にサクサクしたもので不純物を混じえないという観察結果が得られている。

以上1～5号焼土についての説明を加えたが、いずれも東側の崖に向かって傾斜したピットの底面にあるロームの窪みに赤く焼けた焼土が、土器片と共に堆積したものである。なかでも1号・5号焼土は上部に煙出し状の穴を持つ特異な形状をしており、煙道、焚口、灰原を持つ後世の窯跡とは、構造のうえで共通性を持つものかと疑われる。なおこの点については後章において、検討を加えることとする。

四、出　土　遺　物

本貝塚は前述したように主要な遺物包含層が調査前に削り取られ、壊滅した状態であったため、調査によって出土した遺物は量的に乏しく、ごく少量の土器破片、石器及び貝殻にとどまった。以下それらについて述べると、次のようにな

る。

〔土器〕（第6図）

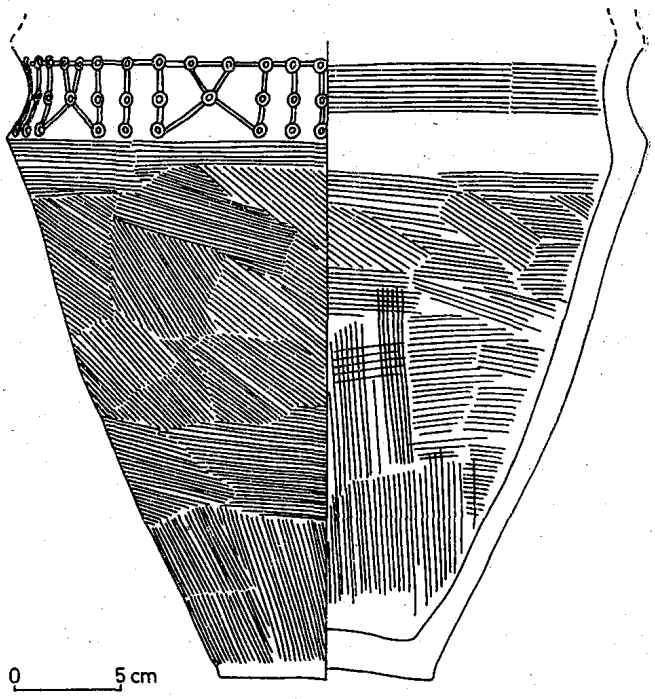
測定値　現在高　二九・五糎、最大径二九・九糎、底径　一〇・一糎、胴部の厚さ　〇・八～一・二糎　底部の厚さ　一・八糎

出土地点　5号焼土内

胎　土　一部繊維を含むが、砂粒などの混入は認められない。

焼　成　再度の加熱を受けているために、本来の状態を知り難いが、焼成は比較的良好なものと思われる。

色　調　口縁近くのくびれ部より上は赤褐色を呈し、胴部は大半が黒褐色となっているが、くびれ部近くの一破片のみは赤褐色となっている。底部はくびれ部同様赤褐色を呈する。土器内面は全面にわたって赤褐色となっている。



第6図　5号焼土内出土土器実測図

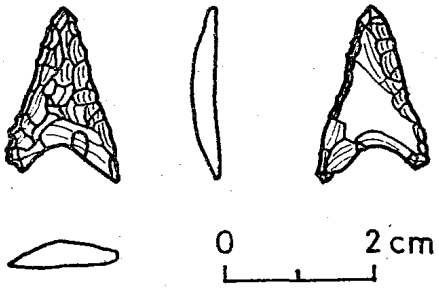
形　態　口縁は欠損しているために不明である。次ぎに、胴部は口縁近くで二段にわたってくびれて、二つの水平な綾を持つが、そのくびれ部から底部に向かっては直線的にすぼまった感じのものとなる。底部は径十糎の平底であるが、底部中央が五糎ほどくぼみ、アゲ底となっている。

器面装飾　器面装飾は竹管による刺突、沈線及び貝殻腹縁による条痕の両種の施文を施しているが、前者はくびれ部に直径六糎、内径三糎の竹管によって、三段にわたる刺突が行なわれ、その刺突の間に太さ二糎の沈線が、縦、横、斜めの三方向に施され、幾何的な文様を形づくっている。後者の条痕は、幅一・五糎の沈線が平行する十数本を一単位とし

て、土器表面では主として右傾した斜方向に、同じく裏面では縦、横の二方向に、一部では右傾方向に施されている。

時　期　口縁直下がくびれ、すぼまった胴部から平底となる器形と、竹管による刺突文、幾何的沈線文と、貝殻腹縁による条痕文をもって文様を施す点を合わせ考えると、既に報告されている神奈川県三浦市三崎町鵜ケ島台遺跡出土の資料を基にして、赤星直忠・岡本勇が認定した「鵜ケ島台式土器」（赤星・岡本　一九五七、岡本　一九六一・六二）とは、本例に細隆起線文が認められないことを除くときわめて類似しており、このことから第6図に示した土器を鵜ケ島台式として取り扱かうことができよう。

なお本例以外の土器は、いづれも小破片であるが、ピット内における二層（ローム混じり褐色土層と黒褐色土層）からは、前期の縄文土器の出土がみられた。



第7図　A3区出土石族実測図

〔石鏃〕（第7図）

測定値　最大長　二・三糎、最大幅　一・五糎、最大厚　〇・三糎、重量　〇・六五瓦

出土地点　A3区ローム面上

石　質　玄武岩質と思われる。

形態及び技法　基部の一部をわずかに欠損しているが、その形態は佐原真が紫雲出遺跡出土資料で行なった石鏃の分類（佐原　一九六四）に従うと、凹基無茎式石鏃に該当するもので、いわゆる二等辺三角形をなし、その先端部の頂角は約三十五度をはかる。まだ基部の形状は、基部の幅一・五糎に対して、〇・四糎の深さで内彎する弧を描いて、えぐられている。なお石鏃の両面の調整については、背面は素材の平坦部を残し、その周辺部に調整がなされ、全面に調整が及んでいる正面と相いまって、その側面観は正面中央部に盛りあがりを示し、背面は直線的となっている。

出土した遺物は以上のほかに、A1、B1区の黒土層内より出土したマガキ、ハイガイ、ダンペイキサゴ、ハマグリ、オキシジミ、ウミニナの貝殻が少量発見されたにとどまり、石鏃以外の石器及び骨角器は全く発見されずに終った。

五、むすび

以上が今回の調査結果の概要であるが、本貝塚は調査前に遺跡の大半、とくに貝層の部分がすでに消滅していたという不幸な状況下に行なわれたにもかかわらず、次の諸点において注目すべき結果を得ることができた。まず第一に、ひとつの河川流域に存在する貝塚遺跡が縄文時代を通じてそれぞれ時間的、空間的にいかなる関係を有していたかという研究課題のもとに一九五二年以来われわれが行なってきた、千葉県栗山川流域に存する貝塚研究のなかで空白となっていた縄文時代早期に関する新資料を獲得しえたという点である。したがってかかる研究課題のもとで行なわれた今回の調査の結果は、同じ地域に存在する他の貝塚において得られた成果との、総合的な比較検討を経たうえで行なわれるべきものであることは論をまたないが、速報的な意味で本稿をまとめたので、次に二、三の問題点を指摘することにとどめておく。それは前記研究課題のもとで一九五二年以来、栗山川流域において数多くの遺跡調査を手がけてきたにもかかわらず、住居址・炉址等の遺構を発見することが少なかったが、本貝塚での焼土堆積を持つピットの発見は大きな意義をもつものと思われるのである。しかもこれらの遺構において注目すべき点は、煙道・焚口に似た構造を持つ1号・5号焼土がその形態において、一九五七年明治大学文学部考古学研究室が、千葉県佐倉市上座貝塚を調査した際に発見した炉穴とよく似ていることである（麻生優　一九五九）。

上座貝塚の場合は長さ二米前後、幅一米ほどの楕円形のピット内に一カ所焼土が堆積し、その焼土の直上には、深くローム層を掘りこんでつくられた煙出しの穴を有していたという顕著な特徴があったが、焼土が二カ所に分離して堆積して

いる高市貝塚とは、焼土の位置とその数、また焼土の上に置かれた円石の有無とを除くと、その形状に多くの一致が認められたのである。なお上座貝塚ではこの炉穴が三方向に煙出しの炉部を持つものであることが報じられているが、高市貝塚においては煙出し状の穴は5号焼土のみでしか発見されていない。しかし本貝塚の場合はすでに繰り返し述べたように、調査以前にローム上面が削ずられ、当初の状態がそのまま残っていなかったという点から、煙出し状の穴をもつ1号・5号焼土より一段高みにある2号・3号焼土、4号焼土の上部にも、あるいは上座貝塚の例と同様に三方向に煙出し状の穴が存在していた可能性が皆無であるとは断じがたい。さらに上座貝塚においては、この炉穴に隣接してほぼ同時期と推定される住居址が二基発見され、その住居址に直接かかわりあると見るべき炉址が住居内には認められないことから、麻生優は炉址を伴なわない住居址の存在に注目し、この住居址がさきほどの特異な構造を持つ炉穴との相互補完的な共伴関係を持っていたのではないかと考えている。高市貝塚ではピット以外の遺構が確認されていないので、その点については不明という外はないが、高市・上座両貝塚ともその焼土堆積の時期が茅山式土器（野島式・鵜ケ島台式・茅山下層式・茅山上層式の型式細分はともかくとして）の時代と一致しており、他に数例相似た発見が知られているが、それらもまた茅山式土器の時代であることは単に偶然の結果とはなしえない。しかも他方において茅山式土器には土器底部の変化（野島式から鵜ケ島台式にかけて土器の底部がそれまでの尖底から平底に移行している）が見られるという事実から、その背景として、大きな社会的変容の存在した可能性を想定することもあながち無謀なことではなかろうと思われる。

かつて清水は栗山川流域に存在する貝塚遺跡から出土する石器類の数量が乏しいことは、それが原材となる岩石の絶対量の不足に由来するものではないかと述べたが（清水　一九五八）、今回の調査において石器類の出土はわずかに石鏃一点にとどまり石片すらも検出できなかったので、これまでの結果をさらに裏づけることとなった。本貝塚の保存不良という点はしばらく措くとして、次表にこれまでの調査による石器の出土数を表示しておく。

栗山川流域の遺跡における石器の出土点数一覧表（清水　1958，　清水・近森　1959，　慶応高校　1961・65　による）

遺　跡　名	時　期	石　鏃	打製石斧	磨製石斧	磨石	石皿	砥石	軽石	石錘	その他	調査面積 m²
八日市場市松山　高市貝塚	早　期	1									32.0
八日市場市吉田　宿井下貝塚	前　期										9.5
八日市場市飯高　飯高貝塚	前　期			1	1						14.0
八日市場市吉田　八辺貝塚	中　期				1					1(1)	28.0
山武郡横芝町　木戸台貝塚	中　期			4							11.2
八日市場市大浦　大浦貝塚	中～後期	1		4	1		2	1	1		16.0
山武郡横芝町　鴻ノ巣貝塚（1次）	後　期					2					10.0
山武郡横芝町　牛熊貝塚	後　期			4			2	1		2(2)	24.0
八日市場市吉田　久方貝塚	後～晩期	1		3	3				1		22.0
山武郡横芝町　姥山貝塚（5次）	晩　期	13	1	8	8	4	1	3	1	18(3)	48.0

(1)　ヘラ状石器　1，

(2)　敲　　石　1，　凹　　石　1，

(3)　ヘラ状石器　1，　石包丁形石器　2，　ポイント状石器　1，　スクレイパー状石器　1，
　　石冠状石器　1，　石剣　4，　石製円盤　2，　勾玉　1，　玉　5，

これによると極端に時期を異にする晩期の姥山貝塚を除き、いずれの貝塚においても石製品の出土が乏しく、栗山川流域における石器のはたしている役割を示すように思われるが、他方姥山貝塚の如くそのような傾向が全ての遺跡に及ぶわけではないことが注目される。この点について近年の調査によって得られた事実を示しておきたい。すなわち、一九六七～六九年にわたって慶応義塾大学考古学研究会がわれわれと共同して実施した栗山川右岸地域の分布調査において、石器類の表面採集結果には地域による濃淡が顕著であり、上流地域から下流に向かうにつれて石器の発見数が減少していく傾向のあることが明らかとなった。それは、方法・規模等を統一し同じ条件のもとで分布調査を行なったにもかかわらず、貝塚の密集する下流地域においてはこれまでと同様に石器類の発見が乏しく、従来の見解を裏書するものであったが、下流地域から上流に向かうにつれ、発見される石器類の点数が増加し、仮に石鏃を例に取っても上流の成田市三里塚附近では一地点で数十点の石鏃を採集することができ、下流地域とはその様相を異にすることが明瞭になった。これは同一河川流域にあっても、石器の数量に関しては遺跡の立地景観との関連のもとで、石器の利用方法を含めて考察しなければならないことを示唆するものと思われる。

最後に本貝塚調査の契機を与えられ、理解ある援助を惜しまれなかった桜井茂隆・山本中庸の両氏、及び八日市場市教育委員会に対しては深く感謝の意を表するものである。また調査にあたって協力された本塾文学部専任講師鈴木公雄、文学部史学科学生（当時）前田燁子・岡本孝之・清水有・鈴木道之助、京都大学大学院学生橋本久の諸氏、並びに本稿作成にあたって種々の御教示をたまわった本塾文学部助教授近森正、同じく大学院学生阿部祥人の両氏に対しても厚くお礼を申しあげる次第である。

（一九七二・七・稿）

文献

赤星直忠・岡本勇　一九五七　三浦市三崎町鵜ケ島台の茅山式土器　横須賀市博物館研究報告（人文科学）1　一八～二〇頁

麻生優　一九五九　佐倉市上座貝塚発見の住居址と炉穴　駿台史学9　一二七～一三一頁

藤村東男　一九六八　千葉県久方貝塚の追加資料 Archaeology 30　二一～二二頁

同　一九七二　千葉県山武郡姥山遺跡（第五次）　日本考古学年報20　一〇三頁

慶応高校歴史研究会　一九六一　千葉県山武郡横芝町木戸台貝塚報告 Archaeology 27　五～二二頁

同　一九六一　千葉県八日市場市大浦大浦貝塚報告 Archaeology 27　二三～四四頁

同　一九六五　千葉県八日市場市吉田久方貝塚発掘報告 Archaeology 28・29　一四～二三頁

岡本勇　一九六一　三浦市鵜ケ島台遺跡　横須賀市博物館研究報告（人文科学）5　一～一五頁

同　一九六二　横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（一）――茅山上層式土器とその周辺――　横須賀市博物館研究報告（人文科学）6　二三～四三頁

佐原真　一九六四　第四章第一節石器「香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究」所収　七〇～九七頁

清水潤三　一九五四　九十九里浜沿岸に於ける低湿地遺跡の研究（予報）　史学二七―四　五七九―五八六頁

同　一九五八　千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）　史学三一―一～四　一九三～二三〇頁

清水潤三・近森正　一九五九　千葉県八日市場市宿井下貝塚発掘報告　史学三二―二　二〇八～二二六頁

鈴木公雄　一九六二　千葉県山武郡横芝町姥山・山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて　史学三六―一　六七～九四頁

同　一九六五　千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて　史学三八―一　一〇三～一二五頁

同　一九六八　千葉県山武郡姥山遺跡　日本考古学年報16　九〇～九一頁